

地下水都市熊本の21世紀戦略

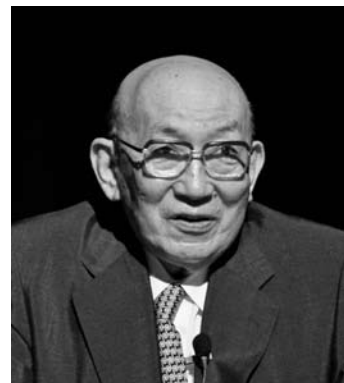
財団法人肥後の水資源愛護基金理事長（肥後銀行常任顧問）

長野 吉彰 様

地下水都市熊本の21世紀戦略

財団法人肥後の水資源愛護基金理事長（肥後銀行常任顧問）

長野 吉彰 様



小説『海の牙』がきっかけ

これから私がお話するのは、「講演」ではなく「ご報告」です。

「20世紀がオイルショックの時代だったとするならば、21世紀は間違いなくウォーターショックの時代になる」と国際連合は言っています。金融界の人間である私が、そのような水の問題にどんな動機で取り組んできたか、またその結果としていまどんな状況にあるか、さらに今後、この熊本で何が憂慮すべきことなのかといったことについて、事実の「ご報告」をしたいと思っています。

現在、熊本市民の人口は約67万人ですが、都市圏には約97万人の住民が生活し、その水道水はすべて地下水でまかなわれています。また、熊本市の水道水は水質的にも大変優れており、厚生労働省の「おいしい水研究会」によるコンテストでベスト3のひとつに入っています。最近では市販のミネラルウォーターを購入する市民もいますが、熊本市の水道水はまさに天然のミネラルウォーターです。しかも水道料金は、全国の平均水道料金並みで、市販のミネラルウォーターの750分の1です。私はこのように素晴らしい天の恵みの地下水を未来に向けて守り続け、孫やひ孫の代まで残そうと訴えて1987（昭和62）年に「肥後の水資源愛護賞」という顕彰事業を始め〔資料1〕、今年で20年目を迎えています。

そのきっかけは、幼少時から水に親しんでいたことありますが、直接の動機は昭和30年代に水上勉の小説『海の牙』を読み、あの水俣病の悲惨な実態を知ったことです。猫が踊るように漁民の少女が神経の病で倒れていくという描写から始まるあの作品にめぐり会ったのが、まさに水問題への関心の発端でした。

また1961（昭和36）年、肥後銀行が初めて東京に出店したとき、古くから文部省唱歌「春のうららの隅田川」として美しく清らかなイメージのある隅田川を訪れてみると、それは強烈な悪臭を放つドブ川でした。ちょうど池田勇人首相の「所得倍增計画」が打ち出された翌年のことで、重厚長大産業の躍進と高度経済成長に舞い上がった日本が、清らかな水と緑豊かな環境を失い、公害列島と化してしまうのではないかという危機感さえ覚えました。

さらに昭和40年代の初め、長崎支店長を務めたときには、2日に1度にしか給水されなくなるという深刻な水不足も体験しました。

熊本の地下水を守るため

「肥後の水資源愛護賞」を創設

近年では水問題への関心が地球規模で急速に高まっていますが、昭和50年代半ば頃までは、まだ非常に低いものでした。その後私は熊本経済同友会や熊本開発研究センターなどの幹部となり、熊本テクノポリスにも携わりましたが、この熊本都市圏を中心とする水資源の質の高さや量の豊かさは、大企業を誘致するうえで大きな魅力になるという事実を踏まえ、機会あるごとに「熊本の日本一の地下水は、21世紀に向けた都市間競争の戦略資源になる」と訴えてきました。

私は、この優れた水資源という地域的長所をいかに戦略的に活用するかが熊本にとって肝心であり、その質の劣化と量の枯渇を防ぐことができれば、最高の地位的価値と優位性をもたらすと確信しています。4年後の2010（平成22）年度には、九州の拠点都市・博多と九州最大の中核都市・熊本が、新幹線によって片道35分

でつながります。この時間短縮効果を最大限に生かす上でも、熊本市の大きな戦略資源がこの地下水にあるということを、私はもっと強調すべきだと思っています。

その根拠として、熊本都市圏の経済・産業面での優位性を水がいかに支えているかということに少し触れておきます。熊本テクノポリスの場合、初めは製造業が弱く、大企業やそれを支える中小加工業の企業数も乏しかったのですが、その後熊本に誘致した優良企業から一様に評価されているのは、やはり工業用水の質と量です。なかでも代表的な優良企業として、ソニーセミコンダクター九州、サントリー、富士フィルムなどがあります。そしてこのような視点から、ささやかでもご恩返しができないかと思って始めたのが「肥後の水資源愛護賞」事業でした。

水源かん養地も保全が必要

これまでに肥後の水資源愛護賞の活動で顕彰したのは、県内各地で延べ222団体と11個人にのぼっています。長年にわたる地道な取り組みが認められ、昨年11月には「ふるさとづくり賞」の大賞にあたる「内閣総理大臣賞」を、今年6月には環境省から「地域環境保全功労者の環境大臣賞」、そして7月には「緑化推進運動功労者としての内閣総理大臣賞」をいただき、熊本の水保全活動のきっかけづくりという役割を少しは果たせたかなと感じています。

それ以上にうれしく、心強く感じているのは、水資源への金融機関の関心がまだまだ低かった頃から、サポーターである私も肥後銀行の役職員たちが水保全活動に取り組み、いまでも支援しているという事実です。というのも、「肥後の水資源愛護賞」の活動を始めて5年たった1992（平成4）年に（財）肥後の水資源愛護基金を設立した当初から、運営資金の大半は当行役職員のきよきん醸金によってまかなわれています。さらにありがたいことに、定年退職にあたって、退職金の中からかなりまとまった金額の寄付をする方もいます。さらには肥後銀行の長年のお得意様の中にも、毎年変わらぬご支援を賜る篤志家もいらっしゃいます。

また、これまで肥後銀行ではかなりの年数にわたっ

て植樹活動をしてきたのですが、今年の2月、阿蘇大観峰のふもとに52ヘクタールの広大な森林原野を購入しました。これは私が提案したことではなく、肥後銀行の現役員諸氏の思い入れによって実現したのですが、これも水資源愛護事業がひとつの企業風土として定着していることが背景となって、この森林購入の実現につながったものと感動しております。

「阿蘇大観の森」と私が命名したこの原野に、今年4月、さっそく苗木2,000本の第1回記念植樹を行いました。また「隗より始めよ」という意味合いから、肥後銀行の内部でも地下水かん養の目的で、雨水の地下浸透マスや、20数ヵ店の店舗で駐車場に雨水浸透舗装を施す等の取り組みをしてまいりました。さらに新店舗を建設する際は、雨水利用システムも導入しています。

最近では、肥後銀行の女性用トイレに400個近くの擬音装置を設置しましたところ、驚くほどの節水効果がありました。このような技術的な問題も含めて、節水の問題についてはまだまだ多くのことができると思っています。

最後に、こうした熊本都市圏の日本一の地下水の源は、阿蘇カルデラからの伏流水と、阿蘇と熊本市の中間地域にある大津町・菊陽町のいわゆる白川中流域の水田地帯が活用されることで、利用と再生の妙が組み込まれた「神業」とでも言うべきシステムから生まれたものであります。この水田は、加藤清正公が、白川の水を白川中流域の水田に分水して1,500町歩ほどの美田を開田なさったということであります。この水田は、水の透水性がきわめて高く、有害物質を取り除く機能に優れています。ところが、この水田が、工業化や宅地化によって1,500町から700数十町歩と半分減少しています。これを何とか復活・保持しなければなりません。その努力をして、日本一の地下水をこれからの世代に引き継いでいくことが、私たちの世代の使命ではないかと思っています。私は今後とも皆様のご協力をいただきながら、水資源愛護事業をライフワークとし、高度成長時代にあられもなく破壊された水文化の再構築活動を支援してまいりたいと思っています。

以上が私の「ご報告」であります。ありがとうございました。

「肥後の水資源愛護賞」

目的

水資源の保全に熱心に取り組み、着実な成果をあげておられる熊本県内の団体・個人を顕彰して、県民の水、特に地下水資源の枯渇と水質汚染防止への関心の輪を広げることを目的とした賞

創設

当時の長野頭取の提唱により昭和62年創設

主催

(財) 肥後の水資源愛護基金、熊本日日新聞社、熊本県

後援

肥後銀行

顕彰方法

- 水資源のかん養・保全
- 節水
- 水質汚染防止

に取り組み、着実な成果をあげている団体・個人など

- ① 県内全域から寄せられた候補情報を審査委員会で選考します。
- ② 年1回 賞状・賞金・表彰旗を授与します。
- ③ これまで19回の表彰先数

延べ **222団体・11個人**

(財) 肥後の水資源愛護基金

名 称	財団法人 肥後の水資源愛護基金
理 事 長	長野 吉彰 (肥後銀行前会長)
目 的	肥後の水資源愛護賞事業の広い社会性と 持続性を図り、活動の拠点を明確にする ために財団法人組織としました。
基本財産	2億3千万円
基金の出捐者	肥後銀行とその関連会社等
創立年月日	平成4年9月28日
事 務 所	熊本市練兵町1番地 肥後銀行本店内

